ローザ・ルクセンブルク

トニー・クリフ
浜田泰三訳

現代思潮社

Title : Rosa Luxemburg
Author : Tony Cliff
Copyright © 1959 by Tony Cliff and Michael Kidron
published by International Socialism, 47 Fitzroy Road London NWI
Japan translation right reserved Tadayuki Tsushima arranged through author.

はじめに

一九一九年一月十五日、革命の天才であり、闘士であり、思想家であった、ローザ・ルクセンブルクの頭蓋は、一兵士の銃床にうち砕かれた。理論と実践とを、二つながら一身に具現したともいえる、ローザ・ルクセンブルクの生涯と仕事を知るには、その思想と行動のいずれをも記す必要がある。それを切りはなすことはできない。だが、その二つながらを正しく評価することを、このような小論にのぞむべくもない。そこで、虻蜂とらずに終る愚を避けるために、この小論の焦点は、ローザ・ルクセンブルクの教えた理論に、主としてしぼられている。というのは、国際社会主義運動への、彼女の、変ることのない貢献の主要なものは、ここに含まれているからだ。

彼女の文章で、英訳されているものは、ごく少ない。故に、できるだけ多様な抜萃を、その著作から行なうことは無用ではあるまい。（大部分、ドイツ語の原書から訳されている。）

科学的社会主義者であり、「すべてを疑う」ことをモットーとした、ローザ・ルクセンブルクが、彼女自身の仕事に対して、きびしい批判的評価以外のものをのぞんだとは思えない。この小論は、その主題である彼女への賛美と批判の精神をもって書かれている。

一九五九年一月十五日、ロンドン

トニー・クリフ

目次

第一章　ローザ・ルクセンブルク　その伝記的スケッチ・・・1

第二章　社会改良か社会革命か・・・14

マルクシズムの防衛のために…14／資本主義の矛盾…16／労働組合の役割…21／議会主義…23／連立政権…24／革命的暴力…26／飢えと革命…30／社会改良か革命か…31

第三章　大衆ストライキと革命・・・34

政治的大衆ストライキ…34

第四章　帝国主義と戦争に対する闘い・・・40

労働運動に高まる反帝国主義思潮…40／ローザ・ルクセンブルクの資本主義的帝国主義に対する闘い…42

第五章　自然発生性、意識と組織・・・50
人間が歴史を作る…50／階級と党…53／ローザ・ルクセンブルクの見解の歴史的根底について…58／階級と党の関係についてのローザ・ルクセンブルクの見解の批判…61／レーニンの考え方…64／分派に対して…72／結論として…80
第六章　ローザ・ルクセンブルクと民族問題・・・82
民族問題におけるマルクス、エンゲルス…82／ローザ・ルクセンブルクと民族問題…87／民族問題でのルクセンブルクとレーニンの相違…92
第七章　ローザ・ルクセンブルクの、政権獲得後のボルシェヴィキに対する批判・・・98
十月革命への熱狂的支持…99／革命の孤立が伴うもの…100／ボルシェヴィキ指導者の過失…102／ボルシェヴィキの土地政策…103／民族政策について…107／憲法制定議会…109／労働者の民主的諸権利の拘束…113
第八章　資本蓄積論・・・119
問題…120／マルクスの図式…122／ローザ・ルクセンブルクのマルクスの図式への批判…127／この批判の批判…135
資本主義の限定された市場…145／帝国主義のその他の経済的効果…147／結論として…152
第九章　ローザ・ルクセンブルクの歴史的位置・・・155
ローザ・ルクセンブルクの蓄積論／ラーヤ・ドゥナエフスカヤ…165
ローザとスパルタクス団／浜田泰三…206
訳者のことば…221

第一章　ローザ・ルクセンブルク　その伝記的スケッチ

一八七一年三月五日、ポーランドの小都市ザモスクで、ローザ・ルクセンブルクは生れた。ごく若い頃から、彼女は「社会主義運動」の活動家だった。彼女は、「ロシヤ社会民主党」（ボルシェヴィキおよびメンシェヴィキ分裂前の）が設立される、およそ二十一年も前一八八二年に結成された「プロレタリアート」と呼ばれた革命党に加わっていた。「プロレタリアート」はその設立の頭初から、その綱領、そのプログラムにおいて、ロシヤの革命運動からずっとぬきん出ていた。ロシヤの革命運動が少数の英雄的インテリによる、個人的テロ行為に、なお限られていた頃、すでに、「プロレタリアート」は、何千もの労働者をストライキに組織し、指

以下　制作中

以下　制作中

第二章　社会改良か社会革命か

マルクシズムの防衛のために

ローザ・ルクセンブルクの全著作を一貫して流れているのは、資本主義を革命的手段で打倒するかわりに、そのボロかくしをすることに労働運動の目的を限定してしまった、改良主義に対する闘いだ。社会改良主義（あるいは、当時いわれていた修正主義）の第一のスポークスマンは、エドゥアルト・ベルンシュタインで、ローザがまず立ち向ったのも彼だった。論文『社会改良か社会革命か』のなかで、彼女は特別製の辛らつさでもって、彼の見解を論破しているが、この論文は「ライプツィガー・ツァイトゥング」（ライプチヒ民衆新聞）に二回にわたってのせられた、続き記事からできている。第一回は、一八九八年九月、「ノイエ・ツァイト」

にのったベルンシュタインの論文への反論として書かれ、二度目のものは、一八九九年四月、彼の著書『社会主義の前提条件と社会民主主義の課題』に対する反論として書かれたのだ。

ベルンシュタインは、労働運動の基本的性格を、社会革命の党ではなく、「民主社会主義的な改良主義の党」として定義し直した。マルクスに反対して、彼は、資本主義の矛盾は尖鋭化していくのではなく、次第に緩和されていくと論じた。資本主義は着実に馴致されていき、着実により順応性あるものとなりつつある、と彼はいう。カルテルや、トラストや信用制度は、資本主義制度の無政府的本性を、漸次、秩序あるものとしていっており、このために、マルクスが予見したような、不況のくり返しの代りに、そこには、永続的な繁栄へと向う傾向がある。さらに、ベルンシュタインによれば、社会的矛盾も、育ちゆく中産階級の力と、また、株式会社という形で、資本所有がより民主的に分配されることによって弱められる。その時々の要請に応じた資本主義組織の適応性は、労働組合や協同組合の活動の結果としての、労働階級の経済的、社会的、政治的条件の改善のうちにも示されている。

このような分析から、ベルンシュタインは、社会主義政党は、政治権力の革命的奪取ではな

以下
制作中

以下
制作中

第三章　大衆ストライキと革命

政治的大衆ストライキ

一八九一年五月、約十二万五千のベルギーの労働者は、大衆ストライキをもって、選挙制度の変更の要求を表明した。一八九三年四月には、およそ二十五万の労働者が団結したもう一つのストライキが、同じ要求をかかげて起った。その結果は、普通選挙制となったが、なお不平等なものだった。金持と「有識者」の票は、労働者や農民の票の二倍から三倍に数えられることとなっていた。これに満足しなかった労働者は、九年の後、憲法の完全な改正を要求して、さらに大衆ストライキをうった。これらの政治的大衆ストライキは、ローザ・ルクセンブルクに大きな感銘を与えた。このテーマのために費やされた二つの論文は（『ベルギーの試み』「ノイエ・ツァイト」一九〇二・四・二六、および『三度重ねてベルギーの試みについて』「ノイエ・ツァイト」一九〇二・五・一四）大衆政治ストライキの、プロレタリアートの闘争の独自な武器としての革命的性質を指摘している。ローザ・ルクセンブルクにとっては、労働者の革命的権力闘争において、政治的、経済的な大衆ストライキこそ、中心的要素をなすものだったのだ。

この手段に対する、ローザ・ルクセンブルクの熱中と、鋭い理解は、一九〇五年のロシヤ革命によって新らしい高みに達した。

「かつてのブルジョア革命では、一方で政治的教育と革命大衆の指導はブルジョア政党に委ねられており、他方、革命の仕事は政府打倒に限られていた。バリケード上の短期間の闘いが革命の闘いにふさわしい形態だった。が、今日では、労働階級は、革命的闘争を行ないながら、一度に、自らを教育し、組織し、指導していかなければならない。革命そのものが、でき上ってしまっている国家権力に対するだけでなく、資本主義の搾取に対しても闘うべく方向づけられているような時には、大衆ストライキが、もっとも広汎なプロレタリアートの層を行動に動員し、これを革命化し、組織化する本来の方法として現われる。それは、それ一つで、資本主義の搾取を抑制できると同じく、築き上げられた国家権力の土台を掘りくずし、打倒すること

以下
制作中

以下
制作中

第四章　帝国主義と戦争に対する闘い

労働運動に高まる反帝国主義思潮

第一次世界大戦に先立つ二十年間に、社会主義インターナショナルのなかにも、帝国主義に対する支持が、じりじりとのびつつあった。

一九〇七年のインターナショナル・シュツットガルト大会は、このことをきわめてはっきりと示した。アフリカとアジアで、この頃、数多い帝国主義勢力の争いがはげしさを増しつつあったことから、植民地問題が議題にとり上げられた。実際には、社会主義諸政党は、各国の彼ら自身の政府の強欲に向っても、声をあげていたのだが、しかし、シュツットガルト大会の討

議に示されたように、インターナショナル指導者の多くのものの考え方は、一貫した反植民地主義の立場というには大ちがいだった。大会は植民地問題委員会を任命したが、その多数派は、植民地主義が、ある積極面を有すると公言する報告を起草した。この草案の結論には、「(大会は)すべての植民地政策を原則的に、また、あらゆる場合に承認しないわけではない」と述べられていた。社会主義者は、植民地主義の行き過ぎを糾弾すべきだが、かといって、そのすべてを否認すべきではない。その代りに、

「彼らは、多くの原住民の生活を改善するために、種々の改良政策を唱導すべきであり……また、できるかぎりの方法で、原住民を独立のために教育してやるべきだ。

「この目的のために、社会主義政党の議員たちは、原住民の諸権利を保護し、それを結んだすべての列国によって保障されるような『植民地法』を定めるべき、国際条約を締結するよう、それぞれの政府に提議しなければならない。」

この決議案は実際には敗れ去った。とはいえ、そこにはほんのわずかの差――一二七対一〇八という差しかなかった。事実上、大会の半数が、公然と帝国主義に組したのだった。

以下　制作中

以下　制作中

追っていくと、その論証の重点が、部門IIにおける剰余価値の一部分は、純粋資本制のもとでは現われえない、ということにおかれており、ローザ・ルクセンブルク自身が、純粋資本制のもとでは、いかなる剰余価値の実現も生じえない、と証明したかのように、その論証を要約していといえるのだ。（このことは、F・シュテルンベルグによって指摘された。）（『帝国主義』ベルリン・一九二六・二〇二頁）

第九章　ローザ・ルクセンブルクの歴史的位置

マルクスの伝記を書いたフランツ・メーリングが、ローザ・ルクセンブルクをマルクス以後の最良の頭脳と呼んだとき、誇張していったわけではなかった。が、彼女はその頭脳だけを労動運動に寄与したのではない。彼女は、そのもつすべて――その心、その情熱、その強い意志、生命そのものを与えたのだった。

何よりもまず、ローザ・ルクセンブルクは革命的社会主義者だった。そして、偉大な革命的社会主義の指導者、教師たちのなかで、彼女は特別な歴史的位置を占めている。

以下　制作中

ローザ・ルクセンブルグ奥付　トニー・クルフ著　浜田泰三・西田勲訳　現代思潮社刊
一九六八年一二月一五日　新装一版
南保印刷株式会社本文印刷　形成社印刷株式会社装本
印刷　有限会社今泉誠文社製本

株式会社現代思潮社　東京都文京区小日向一―二四―八
電話代表（九四三）四四〇六　振替東京七―四四二
郵便番号一一一

© Taizo Hamada, Isao Nishida, 1968.

0098-60203-1909
一九七一年十一月三十日第七刷（増補版）